新魔法物語　リンディ戦記

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新魔法物語　　リンディ戦記

【Ｎコード】
Ｎ２３５１Ｙ

【作者名】
リリィ

【あらすじ】
一人の少年が仕事に恋愛に他いろいろがんばるお話。

※リンディ主人公ものではありません。

※旧タイトル

なのは？フェイト？オレは、リンディさんルートを選ぶぜ！！

プロローグたりえるプロローグ（前書き）

リンディさんルートが少ないから書きます。

宜しくお願いします。m（＿＿）m

プロローグたりえるプロローグ

人と言うものは必ず1つぐらい夢を持っている、たとえば、『美味しい物をたくさん食べたい』、『あの人と付き合いたい』、など必ずあるし、そのために努力もするし、その夢を形にしようとする、ならば、今、自分が置かれている状況もまた、人の夢が形に成ろうとしているところなんだろう。
まぁ、結局何が言いたいかと言うと

自分の夢を叶えようとがんばるのはいいが人様の仕事を増やすな！
と、俺は思う。

というか、俺を見習え！あぁっ嫌な声が聞こえて来る～。

「隊長！もう持ちそうに無いです！！」
俺の思考（至高）タイムを邪魔しやがったのは、俺の副官的ポジションに要ることが多いメガネだ、俺の思考（至高タイム）を邪魔したヤツはこんな説明で十分だ。

ただ、今の状況が思わしく無いのも事実、アレだ、絶対、アレだ、朝の目覚めが特に悪かったし、朝食のメニューの品数が多かったからだ、クソが！

でも、リンディさんに朝、挨拶されたのは良かった。嬉しいかった。最高だった。朝のイライラが一瞬でなくなった。今、この所をよんでいる人は、もうわかっただろう。

俺は、今、恋をしている。

まぁ、だからなんだ、と、思うかもしれないが俺にとってばとても重要で、だから今、説明しているのだ！（誰に？）

はぁ～、現実逃避はやめて考えるか、状況確認をすると今、敵拠点の制圧中だ、その指揮をしているが、何故か通信が入り難い上に敵の展開が早い、確かにこういった所だと通信が聞き取りづらかったりするが、なにか可笑しい…

「敵の展開が早いことが気になる…」

「隊長の指揮が的確だったことなんてないでしょう！！」

「何だとっ！このメガネがっ！！」

隊長をバカにしやかってっ！

「ほらっ！　そうやって子供のように罵倒するからいつまでたっても、評価が得られないんですよっ！」

「だったらどうしろっていうんだっ！　支援だって期待出来ないし！」

「それを考えるのが隊長でしょ！？」

「だったら、その隊長を補佐するのが、副隊長だろっ！」クソがっ無能のやつがいろいろいいやがって！

「あなたは何時もそうやって僕の責にすればいいだからいいですよねっ！！

でも、そんな言い方してるから隊長だなんて肩書き身分不相応だな

んて思われているんですっ」

「……もういい」

くそっやっぱり今日は、最悪だ……。

「っ……すみません……」

……クソっ

…落ち込んでいる場合じゃない。

今、この状況をどうにかしなければ。

「A小隊、B小隊、引くぞっ！！
引いて立て直す！」

『了解っ！』　『了解っ！』

「行くぞ、メガネ！！」

「了解！」

「その必要はないよ」

『……っ！』

「クロノかっ！」

これで仕事も終わりだな、クロノがくればこのまま押しきってもだいじょうぶだろう。

……複雑な気分だが。

プロローグたりえるプロローグ（後書き）

クロスボーンガンダム面白かった。

フルクロスかっこいい！！

一

「悪いお知らせといいお知らせどちらがいい？」
そういってクロノが俺に問いかけてくる。

……聞きたくないが。

だが、聞きたくないといって聞かない訳にはいかない。

「……じゃあ、いい方から」

「分かった。
まず、いい方からだが、今回の通信障害だが詳しくわかっているわけでわないが、意図的にされていたものらしい。」

「……なんだって、
本当か？」

「どうやらそうらしい。まだ、全然わかってないがな。」

もしそうだとしたら。

「そうだ、いろいろ不味いことになる。
まぁ、今回は撤退に使われただけだったから良かったようなものだ。
」
「今度出てくるときはそういった状況下を想定した戦術などやって来るってことか。」

「あぁ、そうだ。

今日は、やけに理解が早いな。ウィル」

「……馬鹿にしてるのか？」

「そうじゃない、褒めているのさ。」

「……ふんっ、いい知らせは？」

クソ嫌味野郎が、いつか俺の靴を舐めさせた上でゲイの野郎をけしかけてやる。

「あぁ、だが、このことが詳しく分かれば質量兵器の強みが少なくなる。」

「まぁ、ミサイルや核ミサイルの誘導ができなくなるからな。」

だが、それだと犯罪者どもにとったら痛いところだろう。

なのに、なぜ？

こんな事件で発覚するんだ？

「まぁ、いろいろとまとめないといけないから、これから艦長と会議だ。」場合よっては、急をようするかもしれないからな。」

……なんだとッ！

かっ…艦長と会議！

不味いぞ、凄く不味い！

どうしよう？

一（後書き）

ル・シーニュかっこいいなぁ、ガンダムタイプのＭＳでありながら他のガンダムタイプにはない女性らしさを感じるデザイン！

二話、庭、二羽（前書き）

リンディさんの描写を頑張って書きました。（笑）

二話、庭、二羽

今、どうしよう？

どうしよう？

行くか、逝かないか、逝くか。

凄く悩む。

……よしっ俺は逝くぞ！！

リンディさんのもとへ！

「どうしたんだ、ウィル？

だまったりして？」

うさっい馬鹿。少しくらい時間をよこせ！！

「…いや、何でもねーよ。」

「…？まぁいい、いくぞ。」

「命令するな。」

「上官だ」

「「失礼します。」」

「来たわね。
さっ座って、今、お茶出すから。」

遂に来てしまったか……
この時がッ！

入ると茶室というらしい空間は、この艦の内装からは、絶対に想像出来ない光景が広がっていた。

明らかに違う内装だ。俺もミッドチルダに住んでいることもあり、やはり、床に座るという概念は慣れない。
だが、今、目の前にいる人物をみたら、その感想は吹き飛んでしまった。
なんと言えばいいだろう。
この茶室という空間は俺と同じミッドチルダに住む以上、余り、触れる機会は無い、にもかかわらずこの場所は自分のテイトリーだと、言わんばかりの自然な雰囲気を彼女はかもし出している。
茶室という緑が映える空間だからか、その、まるで無数のエメラルドの一つ一つを細かく伸ばし一つに束ねたかのような、美しい緑色の髪は今、この雰囲気と、とても合っている。ポニーテールにしていることで動くことを視野に入れていることがわかる。
が、その美しいさは失われてはいない、逆にその美しさに機能美という、決して芸術的美しさを追求したら手に入らない、美しさとは

字が同じでもまるで違う美しさを手にしている。
が、決して髪の美しさが突出している訳ではない。むしろその本人美しさをより、レベルの高いものへと昇華させている。整った顔立ちは一目では、この人物が決して自分より何倍も年齢が離れていることなど、決して分からないだろう。

整った瞳は大人の余裕をかもし出していながらもまるで少女のような、好奇心的な視線をたまにこちらに向けて来ており、正直落ち着かない。

恐らく、自分達に緑茶をご馳走してくれるのだろ。（本当は抹茶だが。）
「艦長僕にお茶はいりません。
お一人でどうぞ。」

クソッ！やるな、クロノ自分であの緑茶を回避するとはッ！
正直あの緑茶と言う飲み物は美味しくない、そもそも何故、お茶に砂糖を入れるのかわからない。きっとリンディさんのことだから、その飲み方が正しいのだろうが、一杯飲めば一発で糖尿病予備軍の仲間入りだろう。

「じゃあ、ウィル君はどうする？」

はいッ終わったー！！

俺の健康終わったー！！
あの、期待した瞳に見つめられたら断ることなんか出来るわけないだろう！！
嗚呼ッ健康診断に引っかからないことが一つのささやかな自分だけの自慢だったのに……。

「……いえ、頂きます。」

「そうッ？
なら、ウィル君の分もださないとね。
うちのクロノと違ってウィル君は私が出すもの毎回頂いてくれるものね。」

毎回の事だが、クロノが俺に信じられない物を見たかのような視線を向けてくる。

……もう、慣れた……。

二話、庭、二羽（後書き）

第０８ＭＳ小隊の漫画版を読んだ。
アニメと違った印象を主人公に受けた。

ノリスあっけなさすぎ。もう少し活躍する所を見たかった。（泣）

三羽、三和、三話

一言で言うならそれは、拷問だった、なまじ、本物の拷問と違ってイヤだ、やめたい、などを言うことが出来ないからより、性質としては災厄であり、最悪だった。

でも、恋に障害は付き物だと勝手に思い込むことしか、今の自分の忍耐力を維持出来ない、そんな状況だ。

「どう？美味しい？」

……嗚呼、その笑顔が今、この状況でなければどれだけ嬉しいことか。

この歳でこれ程、人生の理不尽を身をもって経験しているものも少ないだろう。

っていうかクロノいい加減その目線を止めろッ！もう、その目線いいから、2話だけで充分だから。

「……結構なお手前で」

……口の中であのお茶の何とも言えない甘さが残っている。

……っていうか後味しつこ過ぎるんだが。

「……どうだった？」

俺にリンディさんが期待と不安を合わせたかのような目線をこちらに向けてくる。

「……美味しかったです。……甘味が深くなっていたような印象を受けました。」

「そう？やっぱり、砂糖の種類を変えたのと、量を多くしたのがよかったのね。」

また、量が増えただとッ！？

「私も前よりこっちのほうが好みだわ。」

嬉しそうなあの笑顔、この笑顔を見れたなら、俺の健康診断の結果なんて、些細なことだ。

「さて、世間話は、ここまでにして、来て貰った理由は、解ってると思いますが、これを見て下さい。」

リンディさんの顔がさっきの笑顔とは、うって変わって真剣なものになる、この雰囲気でこの場の空気も真剣なものになる。やはり、艦長と言うもののは、その言葉、雰囲気、表情で場を支配することが出来る能力を持っているからこそ艦長という責任者に成れるのだと思った、その真剣でクールな所と普段の少女のような笑顔とのギャップ。

……たまりません。

三羽、三和、三話（後書き）

第０８ＭＳ小隊の小説版でも読みましょかね。（笑）

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。（前書き）

ついに登場！！通信障害の原因っ！

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。

さて、プチ興奮するのはここぐらいにしておこう、真面目にやらないと俺の評価が落ちるかも知れないからな。

「やはり、先ほどの戦闘ですか？」

クロノがリンディさんに問いかける。

やはり、親子だからなのだろう、この切り替えの早さにはたまに付いて行けないことがある。

だが、誰が今のこの雰囲気から親子の会話だとわかるだろうか。

正直、俺はあの親子の親子らしい会話などリンディさんがクロノをからかっているところしか見たことがない。

やはり、クロノがなにかしらのコンプレックスを持っているからかもしれない。

「えぇ、そうよ。これを見て。」

そういってリンディさんがこちらに一つのファイルを見せてくる。

「これは？」

「現場にまだ僅かに残っていた物です。」

「これは……粒子？」

そうか、これがあの通信障害の原因か。

「えぇ、この特殊粒子はどうやら通信障害の原因でおそらくＡＭＦの原因なのではないかと言われているものらしいの。
だから、私達はこの特殊粒子を暫定的に『ＡＭ粒子』と呼ぶことになりました。」

「ＡＭＦってアレですよね、魔法を無力化してしまうっていう。」

「正確には魔法結合を解いてしまう現象だ。」

クソっカッコつけやがって。

「えぇ、その現象よ。
特定の世界などでも起こったりする現象なんだけど、そういった世界では結構ありふれた物なの。」

「そして今回、あのグループがその粒子をばら蒔いたと。」

「えぇ、でもその粒子を使ったことはそれほど重要ではなくて、問題なのは、恐らくこの粒子を人工的に生産と戦術規模での散布が可能だということよ。」

「なぜ？
人工的に生産したということがわかるんですか？」

「ＡＭ粒子のある世界から持ってきたら手間だってかかるし効率的ではないからよ。
それにこの粒子は一度、散布したからといってずっとその空間にある訳ではないの。
だから、それこそ戦闘するなら一定時間ごとに散布し続けなければ、通信出来ない空間での戦闘なんか無理なの。」

なるほど、デリケートな粒子なのか。

四つ葉のクローバーってマメ科の植物なんだよね、確か。（後書き）

今日は∀ガンダムを見た。
富野節が映える映える。
こんなセリフの回し方をしてみたい。

自分の中での戦隊物は5人（前書き）

本編開始時（一期）のクロノの年齢がわかる方がいたら教えていただけないかと。

教えていただけたら嬉しいなと。

自分の記憶が正しいければ１４歳だったような？

しかしそうなると、いろいろと不味いことになるのではないか？
今の、管理局の中にこういった状況下での戦闘経験やノウハウなんか殆どゼロだろう。

「私は、この状況を重く受け取っています。
今回の事件でこのことを知ることができたのは幸運だったと思っています。」

まぁ、何も知らず聞かされず、ハイ、戦場なんて絶対にイヤだからな。

「では、艦長、この事どのように処理するつもりですか？」

あっ俺のセリフ。

……取られた。

「えぇ、この事は、既に管理局上層部に報告しました。」

「そうですか、失礼しました。」

「いえ、クロノ執務官が心配になるのも仕方がありません。」

なら、安心だろ。

後は上がどうにかしてくれるさ。

しかし、管理局上層部はこの事で質量兵器の脅威が少なくなったと、判断しこのあとの1年後に第1管理世界『デズン』第2管理世界『イスミカ』が管理局に対し宣戦布告、戦争が始まった。

自分の中での戦隊物は5人（後書き）

『なるほど、豆知識』

メタスのビームサーベルは6本装備されている。

な～ぜ～？

6羽で～も七面鳥っ♪（前書き）

主人公の年齢は、クロノと同い年です。

6羽で～も七面鳥っ♪

今、俺は管理局の次元航行部隊本局の局員食堂にいる、1週間くらい前に次元航行を終わらせてきて今は、待機中だ。

待機中だとしてもやることは沢山ある次元航行任務中に起こったことなどの報告書の作成と提出、戦闘訓練やデバイスの調整や整備などいろいろとある。まぁ、デバイスの整備などは自分の手に負えない物などはデバイスマイスターにやって貰ったりしないといけない。そして、デバイスマイスターにやって貰う場合はいろいろと提出物が必要になる。

非常にめんどくさいことしかない。だから、俺達のなかでは、『雑務中』などと呼んでいるヤツもいる。

まぁ、こうした雑務は管理局員の華やかなイメージにそぐわないし、地味だからしかながないかも知れない。

さて、無駄な思考は、止めて朝食でも食べるか。
やはり、本部の食事はいい。次元航行任務中の食事は積み込む容量が限られて来る分、ここの食事と比べれば天と地の差だ、やはりメニューが多いと豪華な気分になる、まあ、全部食べることは出来ないが。

本部食堂は非常に大きいなんせ、この本部にいるだいたいの人はここで食事を摂るからだ、一体どれぐらい高いか見たとしても分からない高さの天井、しかし高いからといっいて決して不自然に思わせないように天井では朝の爽やかさ、とでもいのだろうか。
そういった自然の朝の森みたいな映像が流れていて、その映像の雰

囲気に合う音楽が決して自己自重しないレベルの音量で流れている。
今日は珍しく寝起きもいいし、いい日になるだろう。今日は1週間くらいたったのだから、リンディさんにいろいろとアプローチをかけるのもいいし、そういった計画を練るのもいい。
兎に角早目に今日の仕事のノルマを終わらせることにしよう。

『……昨夜に……第一……』

……なんだ？騒がしい？
何があった？

「隊長、昨日あった。ニュース見ました？」

「なんだ、メガネか。」
つまらん。
朝、最初に見たのは、こいつの顔かよ。

「……相変わらずですね……。」

「どういたしまして。で、どうした？」

「……ですから、昨日のニュースですよ。」

「ニュース？なんか、あったけ？」

「はぁ～、第一管理世界『デズン』と第二管理世界『イスミカ』が管理局に対して宣戦布告したことですよ。」

「……何それ？いつ頃にやってた？」

「だいたい管理局標準時間１０時くらいか１１時くらいですかね。」

「なんだ、そんな時間なら起きてねーよ。」

「そんな、時間っていつも何時ごろに寝てるんですか？」

「うん～ん、９時くらいかな。」

まぁ、自分でも早いとは思うがまだ歳が歳だからな。

背が低いときっとリンディさんにも魅力的に映らないだろう。

「……そういう所だけは年相応なんですね……。」

「まぁ、１０歳だしな。」

6羽で～も七面鳥っ♪（後書き）

もし、このあとがきを読むナイスな人達がいるならこのあとがきを少しでも有意義な物にするために、豆知識を書こうと思います。

是非この知識を学校や会社や家の人に言って優越感に浸るのもいいかもしれません。

『今回の豆知識』

5円玉に穴が空いているのは、昔は五円玉に使われていた、真鍮が高価だったので材料費などの節約のため。

たしか、そうだったはず。

違ったらごめんなさい。m（＿＿）m

ラッキー7をあなたに。（前書き）

主人公の名前はウィル・ハウスダットです。

１０歳です。

ラッキー7をあなたに。

なるほど、俺が寝ている間にこんなことが起きていたのか。

「それで？『デズン』と『イスミカ』はどういった状況なんだ？」

「今、『デズン』と『イスミカ』の管理局支部が状況の確認と交渉していますよ。
まぁ、無理だと思いますけどね。」

そりゃそうだろう、こんなことで引くようなことがないくらい時間や準備を重ねて来たはずだし。

「交渉しているってことは、まだ、武力衝突まで発展してないってことか。」

「えぇ、支部が時間稼ぎしてますよ。」

「上層部とかは戦争したがりそうだな。」

まぁ、管理局は質や量や技術的にも勝ってるはずだからな。

「それに、勝てば他の管理世界に対して影響力や発言力が増えますからね。」

「堂々と管理世界に干渉しやすくなるな。

それで？俺達の出動とか来ると思うか？」

「さぁ？でも、多分宇宙空間か、次元空間になるから艦隊戦になると思いますよ。
だって、宇宙空間とか次元空間は、バリアジャケットじゃ無理ですし。」
バリアジャケットは確かに外的な物に対して優秀な魔法だが、外的要因（環境や敵からの攻撃）に対して結局は守る魔法だから、宇宙空間とかだと酸素とか生命維持ができる訳ではないからな。

「じゃあ、星に着いた後の制圧が任務になるか。」
「そうですね。
まぁ、規模が大きく成っただけで普段とかわらないですけど。」

「……はぁ？
普段通りだと思っていると怪我するぞ。
相手は今までと違ってちゃんと訓練を受けている正規軍人になるんだからな。」

「はいはい、自分より年下に心配されるほどではありません。」

「……隊長に対しての言い草かよ。」

「自分のほうが経験豊富ですから。」

「……チッ」
……ウザイくそメガネだな。

「そうかよ、じゃあ俺は行くぜ。」

「隊長、何処に行くんですか？」

「ずっと、話し込んでいる訳にはいかないだろ、俺は戦闘訓練してくる。　どちらにしろ戦闘は避けられないからな。」

「そうですか、頑張って下さい。」

さて、部屋にあるデバイスでも取りに行くか。

俺の部屋は艦の戦闘部隊の隊長という役職に付いている以上、他の管理局員と違って部屋の面積は広い、次元航行部隊本局（通称『海』）は、ここはさまざまな管理世界に行く性質上、危険な状況が多い　だから、その分魔力資質が高いもの、俗にエリートというヤツが多い　そういった環境のため地上本部（通称『陸』）にくらべ設備がいいのは事実なんだが、（そういった『海』と『陸』との設備などの差や『陸』での管理局員の引き抜きなどがあったりするせいで『陸』との仲も良くない。）それでも１０歳のヤツに与える部屋の規模としては広いのではないかと思わなくはない、確かに魔力資質は『ＡＡ＋』で成長期だというとも含めると将来的に考えれば大きな戦力になると思えばこの部屋の大きさは不自然では無いのかも知れない。

だが、俺としてみればこんな１０歳のガキがこんな大きな部屋というのは何だか落ち着かない。

しかも、俺には趣味といった趣味らしい趣味があるわけもなく、部

屋だけが広いのでとても、殺風景で余り人間味のある部屋とはいいにくい。

部屋にある家具といったらロッカーやベッドにテレビ、端末付き机くらい　だ（机の端末でデスクワークができるので便利。）まぁ、支給品だが、それに後、使っているのは、バスルームとトイレくらいで、後、使ってない部屋が2～3部屋くらいある。

さて、デバイスも持ったし、訓練に行くか。

……うん？
あのエメラルドのような髪はまさかッ！！

リンディさん！？
リンディさん！？

ヤバい！どうしよう！

髪はだいじょうぶか？！寝癖はついてないよな！？顔は洗ったけ？！歯は磨いたか？！口臭は大丈夫か？！

「あら、ウィル君おはよう。
今日もお互い頑張りましょうね。」

……OTL
あぁ、話す機会がっ！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2351y/

新魔法物語　リンディ戦記

2011年11月26日22時46分発行